

特色ある学校

さらなる発展を目指して

元 大阪市立都島工業高等学校長
山田 溪

輝く歴史と伝統

(1) 創立——国、大阪市の期待を担って

本校は、明治40年開校が認可された（校名：「市立大阪工業学校」、課程：4年）。開校当初から国及び大阪市の本校に寄せる期待は、極めて大きなものがあった。

このことは、開校式に小松原文部大臣、山下大阪市長、高崎大阪府知事等が来賓として参列し、文部大臣自らが訓辞を述べたことから推察できる。

学校の施設・設備は、当時の国立の東京、大阪高等工業学校と比べても遜色のないものであり、教育への取り組みも極めて先進的であった（高小卒対象の入試に英語を入れる）。

学科は開校当初、本科として機械科、建築科の2科、選科として機械科、建築科、分析科、家具科が設置され、明治43年、本科に分析科が加えられた。

その後、校名を「大阪市立工業学校」と改称し、電気科を設置（大正8年）、さらに土木科を設置（大正11年）するとともに、選科を廃科した。

(2) 校舎移転——「天下の都工」へ

鉄道省による大阪駅拡張計画により学校移転が決まり、大正14年、現在の都島に校舎が完成した。翌年、校名を「大阪市立都島工



業学校」と改称、我が国唯一の6年制工業学校として都工時代の幕が開かれることになる。

昭和4年6月4日、昭和天皇が御臨幸になられたが、これを記念して建てられた臨幸記念碑は、その後校舎改築の際も移転されることなく、現在も同位置に凛立している。

充実した施設・設備、力量豊かな教師陣を擁し、資質・意欲に溢れた生徒が集う都工は、「天下の都工」と誇るにふさわしい工業学校として、その評価を年々高めていった。

そして、都工関係者の専門学校昇格の想いが実り、昭和18年4月「大阪市立都島高等工業学校」が併設された（戦後、大阪市立大学理学部の母体となった）。

戦後、都工は6・3・3制実施に伴い「大阪市立都島工業高等学校」として新たな歴史を刻むこととなった。

現在、機械科、建築科、電気科、都市工学科、理数工学科、機械電気科の6科、36学級（各科各学年2クラス）を擁する大阪府下全公立高校中最大規模校であるとともに、大阪市が誇る伝統校であることを学校全体が自覚し、特色ある学校づくりに情熱を込めている。

時代に対応した教育の推進

都工は、常に時代の進展をふまえ、それに

対応する教育の実践に努めてきた。

その教育活動及び成果について紹介する。

(1) 「土木科」から「都市工学科」へ

一般に「土木」から受けるイメージは、単に基礎的な構造物を造るという狭い領域でしかなく、一般都市はもとより地下、海洋、宇宙に関する開発までの領域を包括している現代の土木工学の内容とは大きな差異がある。

都市化がすすみ、人間主体の場としてより快適で効率的な都市空間が求められる中で、我が国においては、土木工学は目覚ましい発展をとげ、世界的にその評価は極めて高い。

このような状況をふまえ、都工としては土木科の蓄積してきた実績を継承しつつ、新たに都市デザイン、環境問題等をも学習領域とする学科を構想・検討し、平成2年度から「土木科」を「都市工学科」に改編した。

その成果は、進学、公務員採用の面で顕著にあらわれている。

(2) コース制の導入

進学志向の生徒増をふまえ、都工は、主たる進路指導を進学・一般企業・公務員とし、これを「進路の3本柱」とし、その確立に務めることを確認した。

そして、対策として進学希望生徒対象の「英数コース」、就職希望生徒対象の「工業コース」を、平成2年からスタートさせた。

コースでの学習は2年次以降で、各学年とも「英数コース」は英語2単位、数学2単位。「工業コース」は工業教科4単位を選択履修する。このコース制を導入して10年が過ぎたが、大学等進学に関しては着実に成果が上がり、全校的に進学者数は増加している(「表：進路状況」参照)。

(3) 全国初の「理数工学科」の新設

平成元年時、大阪府下の全日制公立工業高校における化学系学科の設置状況をみると、8校16学級(各学年)で、これは将来的に過剰であると推測できた。

このような状況とともに、都工では、年々大学等への進学希望者が増加している傾向をふまえ「工業化学科」を廃科し、工業科としての基礎・基本を重視しつつ英数理系科目の単位数を増やし理工系大学等への進学も十分可能な学科の新設を構想し、平成4年、全国初の新学科「理数工学科」をスタートさせた。その概要を次に示す。

a 目 標

- ・英数理など普通教科の学力伸長を図るとともに、工業に関する基礎的・基本的知識及び技術を習得させ、具体的事象を科学的に考察する能力と態度を養う。
- ・実験・実習を中心に体験的・実際の学習を充実し、課題解決学習を重視し、科学的・技術的・思考力及び探求的・創造的な能力と態度を育成する。
- ・科学的認識を基盤に生涯学習する意欲をもち、時代の進展、社会の変化に主体的に対応できる資質を育成する。

b 特色ある専門科目 [平成4年度]

- ・理数工学実習(1年:3単位, 2年:3単位, 3年:2単位) 分析, 無機・有機合成, 応用物理, 化学工学, 物理工学, プラント等の実験・実習を通じて化学・物理に関する基礎・基本及び工学に関する必須的知識・技術を総合的に習得させる。また, 情報技術を活用したデータ処理, 分析, 実験結果の評価方法等を学習する。
- ・理数工学I(1年:3単位, 2年:2単位, 3年:4単位) 化学的・物理的現象等について, 数学的な手法を通じて基本的概念や原理・原則の理解を図り, あわせて数学

的表現や論理的思考を養う。

- ・理数工学Ⅱ（２年：３単位，３年：２単位）
化学的・物理的現象等の基本的概念や原理・原則を系統的・発展的に学習し，化学・物理を総合した物理化学，応用物理に関する理解を深める。
- ・理数工学Ⅲ（３年：４単位） 理数工学Ⅰ・Ⅱを基盤として広く工業に関する知

識・技術を習得させ，管理・システム技術の基礎的・基本的知識・技術を学習し，情報技術を有効に活用できる実践力を養う。

（４）「進路の３本柱」確立の状況

（１）～（３）で述べたように，都工は時代に対応し，生徒のニーズに応える学校づくりをすすめているが，「出口」に関するデータ

進路状況[最近５年間の決定者数] [註：大学の（ ）内は国公立大学進学者数]

区 分		学 校 全 体					理 数 工 学 科				
年 度		9	10	11	12	13	9	10	11	12	13
進 学	大 学	73(29)	69(23)	105(27)	119(23)	140(23)	34(12)	23(8)	40(11)	35(7)	40(7)
	短 大	17	22	22	16	6	3	2	4	3	2
	高 専	41	41	64	63	59	10	11	17	19	14
	そ の 他	27	44	40	39	39	5	9	7	5	6
就 職	公 務 員	25	21	25	26	26	1	0	2	1	1
	一 般 企 業	250	224	162	163	167	14	17	6	12	4
	そ の 他	7	0	4	5	1	0	0	0	0	0
そ の 他		29	41	40	36	37	12	13	3	3	11
合 計		469	462	462	467	475	79	75	79	78	78

として最近５年間の進路状況を示す。

その成果が注目されていた大学等への進学者数（そのほとんどが理工系）が順調に伸びてきていることから，学校として掲げた「進路の３本柱」は確立されたと言える。

特に新学科「理数工学科」は，その主目標である大学等への進学者数が70%を超えたが，これが他学科の進学率上昇に波及したのは明かであり，科としての存在意義があらためて認識されたかたちとなった。

（５）国際交流

都工の教育に関する国際交流は，年々盛んになってきている。大阪市教育委員会による高校生海外派遣事業（オーストラリア，マレーシア）で選抜派遣された生徒の現地ホームステイの経験などが報告され，生徒たちの外国を知る一助となっている。

また，各国からの教育視察団等（米国・カリフォルニア，イタリア・トレント，オセア

ニア，韓国）の訪問を積極的に受け入れ，都工及び我が国の工業教育を紹介した。

さらに特筆すべきは中国山東省水利学校との交流である。大阪市の幹旋で平成４年秋から始まり，平成６年６月，都工に水利学校名誉校長，副校長，山東省教育庁関係者を招聘して友好学校協定が締結された。

水利学校は，山東省内の最難関校で，工業科を主体とした生徒数1800名（全寮制）の大規模校である。現在，両校の教職員及び生徒による学校訪問がつづけられており，その交流を通じて学校はもとより，両国の歴史・文化・生活等への理解を深めている。

さらなる友好推進を期待するかのようには，都工の校長室には，水利学校から贈られた深紅地に金糸の刺繍「並肩合作同発展 携手走向新世紀」の大ペナントが輝いている。

（６）都工祭，部活動

全校生徒が都工生気質を漲らせて取り組む



伝統の体育祭(各科応援スタンドが並ぶ)

学校行事に、都工祭がある。

都工祭は、体育祭と文化祭から成っているが、どちらも各科ごとに準備がすすめられ、毎年、生徒たちの誇り、情熱、意欲を感じさせる見事な内容である。

日曜日に開催される体育祭は、学校関係者、地域の人々に応援席は毎年満席の盛況で、生徒たちが日数をかけて作製した各科スタンドでの華麗で力強い応援、各競技にベストを尽くす選手の姿に大きな称賛が寄せられる。

また、文化祭における各科の平素の実験・実習を生かしつつ生徒のアイデア等も盛り込んだ展示・実演は、参観者から「さすが都工」と高い評価を得ている。

部活動も全校的に盛んであり、運動部17部、文化部15部の計32部が、それぞれ質の高い活動をつづけている。その中で、最近の刮目す



浪速工業会によって建てられた明都館内部

べき部として理科学研究部がある。

理科学研究部は「科学の甲子園」と称される全日本学生科学賞に出品し、45回中42回大阪府代表として中央大会にすすみ入賞をつづけている（そのうち内閣総理大臣賞3回、科学技術長官賞3回受賞）。

（7）浪速工業会(同窓会)の強力なバックアップ

都工卒業生の同窓会「浪速工業会」は、昭和9年「社団法人」資格を認可され、現在、法人として活動するとともに母校発展のための強力な支援をつづけている。

講堂専用の校舎を切望する学校の事情を理解し、浪速工業会が主体となって資金を調達し、平成4年完成した明都館（講堂の名称）もその一つである。

さらなる発展を目指して

週5日制が完全実施となったが、都工は授業内容を質的に低下させず、また、特色ある教育活動を円滑に推進していくために、週4日7時限授業を実施している。今後もこのかたちを継続していくが、このことは「進路の3本柱」を維持していくためにも不可欠である。

また、現在全校的に「英数コース」、「工業コース」のコース制を採り、その成果は広く認識されているが、平成15年度からは、さらに各学科内で各科の特色ある専門性を高めるためのコースを設けて生徒に選択履修させることにした。この成果をもまた期待したい。